

平田篤胤の産霊神思想からみた生命の誕生

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
市川きみえ

生命の誕生は、本来、自然の営みである。しかし、現代の日本では、周産期医療が進み、ほとんどの出産は医療の管理下にある。また、生殖医療も進み、受胎から誕生にいたるまで、生命誕生の自然性が損なわれつつある。それに並行して、科学の進歩と共に、自然も損なわれてきた。物質の豊かさが求められ、自然から得られる心の豊かさは体験しにくく、人々の心は病む一方である。

しかし、著者は、長年、助産師として自然出産に携わり、その自然の摂理の中に、神の力や靈魂の存在としか言えないものを感じていた。なぜなら、自然出産の場では、目に見えない偉大な力が働くことが実感されるからである。そして、母親たちも神の力や靈魂の存在が実感されるような、神秘的な出産を体験され、その場を共有した助産師に、自ずとそれを語られる。その内容の主な点は、例えば、「誕生の日や時刻が、家族や親族の誰かと一致する」とか、「受胎や誕生の日が親族の死の時期と関係する」とか、「家族の都合の良い日や時間帯に誕生する」といったことなどである。そういった体験から、母親たちは、亡くなった親族や先祖も含めた、家族や親族とのつながりの中から、命のバトンを享けることを実感する。そうして、永遠の生命のつながりに、わが子の生も自分の生も位置づけ、生きる意味や育てる意味を見出し、わが子を愛しみ育てていく。

さて、日本人の古代感覚である神道では、生命誕生に関与する神の力は「産霊神」である。「産霊神」とは、万物を創造する神である。国学者平田篤胤は、靈魂の行方を知ることによって心の内に「霊の真柱」が築かれるとして、主著『たまの真柱』のなかで『古事記』を哲学的に解釈し、産霊神による宇宙生成論を展開し、死後の靈魂の行方を説いた。そして、後に、前世と再生について語る少年勝五郎に出会い、生まれ変わりに関する先駆的著作『勝五郎再生記聞』を記している。

著者は、神秘的な出産を体験した母親たちのなかに、「霊の真柱が築かれる（心の内に、しっかりとした柱が立ち、精神が安定する）」様子を、数多く見てきた。死後の靈魂の行方を知ることと同様に、誕生における靈魂のむすびを知ることにもまた重要である。そこで、本論文では、平田篤胤の思想から「産霊神」を取り上げ、母親たちの出産体験と、著者が助産師として経験した生命誕生の神秘に産霊神がどのように働いているかを考察し、「お産の霊性」の重要性について検討した。